

わたしは60年の人生で李一族についてほとんど何も知りませんでした。しかし、心の中にはなかなか切り離せない思いがありました。もっと知ってみたいという気持ちと傷つくかもしれないという恐怖の共存。わたしの父、李其禄は倉董事長にとって2番目の兄に当たります（倉董事長の姓はもともと李で、14歳のとき倉家に養子に入りました）。父は若いとき日本で電機を学び、帰国後は台電羅東発電工場でエンジニアとして勤めていました。ところが、当時流行していた結核にかかり、29歳という若さで帰らぬ人となりました。3歳の李青陽と9ヶ月のわたしを残して。母はふたりの子供を連れて家を出ました。生活は貧困を極めました。娘とつれづれは再婚しましたが、わたしにはその後



10数年間、父親の愛情も温かい家庭もなく、ずっと悲しみの涙を流していました。しかし、長年の苦勞、挫折、屈辱も負けず努力を続けた結果、公務員の職を得て、3人の子供にも恵まれ、40年にわたって幸せに暮らすことができました。一方で李一族の話は風の便りに聞く程度でした。

5年前、兄（李青陽）の娘の結婚式で李一族の人たちに会いました。その中にひとり、白髪を混じり丈夫そうな人がいました。彼は威厳を備え、眉間からは智慧と慈悲が感じられ、ユーモアに満ちた語り口でいろいろな話をしました。和やかな感じでもいつも回到りに気を遣う人でした。それがわたしの6番目のおじさん合璧グループの倉董事長だったのです。わたしの親戚にこんな傑出した企業家がいことが信じられませんでした。彼の会社はとて大きく、多くの利益を上げ、たくさんの従業員を率い、さらに多くの貧しい人々を助け、社会に利益を還元し、国家にとっても多くの外貨を獲得していました。わたしはそんな倉おじさんに尊敬の念を感じずにはいられませんでした。そして自分が李一族の一員であることを誇りに感じました。

台湾、日本、上海を忙しく駆け巡る倉おじさんはわたしたちのことを忘れませんでした。親戚で彼の会社を訪問するツアーを企画したとき、わたしを誘ってくれたのです。それは冬の日に差し込んだ一筋の陽光のようで、わたしの心は温もりを感じました。やっと李一族に戻れた、そんな気持ちでした。倉おじさんはこれまでわたしが会ったことのないところを紹介してくれたり、李一族にまつわるいろいろな話を聞かせてくれたりしました。本当に感動しました。涙が流れ、言葉に表せない気持ちでした。わたしは倉おじさんにずっと連絡しなかったことを恥ずかしく思うとともに、倉おじさんの健康と成功を心から祈りました。

4月20日早朝、わたしは胸躍らせながら空港に行きました。訪問ツアーの親戚たちは、男はスーツ、女はきれいな服装で、待合室では一際ほかの人たちの注目を集めていました。わたしたちは上海嘉定に到着、そのあと合璧電子公司に行きました。そこでわたしたちは満面笑みの従業員たちに迎えられました。そのあと目に入ったのが宮殿のような工場内の庭園。そしてきれいに整理された建物。わたしは倉おじさんの話を聞いて彼の経営理念、価値観、处世哲学がいかに偉大で、かつ謙虚で卓越したものかを知りました。工場は公園のようでも、学校のようにも、家庭のようでもありました。従業員は積極的で縁を大切にし、環境を守り、善い行いをし、他人のことを思いやっていました。それにみんな家族のようで、それぞれ責任を持ちながら「気配り」と思いやりで接する」という態度でお互い助け合っていました。多くの従業員が進んで早朝4時半に4キロのジョギング、体操、唱歌に参加したあと、工場に戻って清掃するなど、みんなが合璧という大きな家族の下で頑張っていました。

早朝4時半、小雨が降る中、わたしたちもウォーキングで千年銀杏公園へ運動に行きました。振り返って工場の庭園を見ると、

草木も丁寧に植えられ、その中に倉おじさんの恩師が題字を書いたという石碑がありました。石碑には「一日彫工の人となれば、一生その情を受ける」という倉おじさんの母校彰化師大附属高工に関する言葉と同校の歴代校長の名前と任期もありました。この石碑を立てた際には実際に恩師を招き、植樹も行ったそうです。「その実を食した者は木を思い、その水を飲んだものは泉を思う」。倉おじさんはこのことを忘れずに感謝の気持ちでそれを実践したのです。「感謝がわたしたちを成長させ、それに報いることで達成感が得られる」。倉おじさんはこうして合璧公司を今日のような偉大な会社にしたのだと思います。

工場周辺の庭園には白い彫刻像が点在しています。中国文明を象徴する孔子、ギリシア文明を象徴するアリストテレス、インド文明を象徴する釈迦。それに芸術を象徴する花や音楽の神様。倉おじさんはこれらによって「人と人」、「人と自然」、「人と天」、つまりは「信頼、感謝、恩返し」、「真善美、共生共榮」、「天人合一と禪」という会社の価値観を表しました。こうした東西文明の融合こそ合璧公司の企業文化の特質であり、国際的発展や永続経営の原動力となっているのです。庭園ではいたるところに詩のような情緒や名画のような風景が見られます。そしてそこにある松、銀杏、柳からは代々伝わる精神が感じられます。

草花の中を歩き疲れたら、桜の木の下か思源河畔の小道で一休み。そこで心が自然と一体化した「人と自然」のふれあいを感じることが出来ます。

清潔な工場にはさまざまな設備が設置され、生産ラインでは工員たちが規律を守りながら効率よく働いています。倉おじさんの経営理念は「弛み無し不断の思考と行動を取る。誠実に変化に適応し、卓越した創意を図る。価値を創造し、共生共榮を図る。感謝と報恩の念を以て、社会に寄与」です。これを聞きながら、わたしは企業家の新しい考えや価値観についての授業を受けているような気になりました。それはとても収穫の多い授業です。それから、もし従業員に何か問題が起きたとき、倉おじさんは2分でどうするかを決めるそうです。こうやって援助した老人、病人、障害者、子供などの弱者は多く、そのために毎月何百万もお金を使っています。また、新しい従業員が入社すると、彼らに100元のお祝いを贈るなど常に大家族の面影を見て、従業員の信頼を得ています。

わたしは子供のころから黄山に赴けるのが夢でした。しかし、同時に三食ともに食べられず、常に栄養失調のためたびたび貧血で倒れており、年を取ってからは心臓も弱くなり、登山やウォーキングはできなくなってしまいました。黄山に行った人はみなその雄大な素晴らしい景色を話します。しかし、わたしにとっていき登るとなると、それは大きなプレッシャーでした。それで4月23日、わたしは體に乗って、この壮大な自然の芸術を見に行きました。自分の足で行かなかったのは、「何も犠牲を払わなければ得られるものはない。払う犠牲が大きいほど生活も素晴らしいものになる」という倉おじさんの訓誨に反する行為で申し訳ないのですが、それでも行ってみると、黄山の景色は美しく、自然と一体となる喜びを感じる事が出来ました。

倉おじさんは事業で成功しただけでなく、道徳、倫理、慈善などの観念を貫き、さらにそれを多くの人に教えています。生活は慎ましく、厳しく、信頼と規律を重んじ、感謝とそれに報いることを忘れず、私欲を肥やすこともありません。70歳を越えた今でも常に学ぶことを辞めず、努力を続けています。本当に感心します。彼の成功は努力の賜物、わたしたちの手本、企業家の見本、李一族の精神的リーダー、台湾の光です。最後に倉おじさんの健康と永遠の発展を心からお祈りします。 台湾台中 姪女 李秀真

清涼な工場にはさまざまな設備が設置され、生産ラインでは工員たちが規律を守りながら効率よく働いています。倉おじさんの経営理念は「弛み無し不断の思考と行動を取る。誠実に変化に適応し、卓越した創意を図る。価値を創造し、共生共榮を図る。感謝と報恩の念を以て、社会に寄与」です。これを聞きながら、わたしは企業家の新しい考えや価値観についての授業を受けているような気になりました。それはとても収穫の多い授業です。それから、もし従業員に何か問題が起きたとき、倉おじさんは2分でどうするかを決めるそうです。こうやって援助した老人、病人、障害者、子供などの弱者は多く、そのために毎月何百万もお金を使っています。また、新しい従業員が入社すると、彼らに100元のお祝いを贈るなど常に大家族の面影を見て、従業員の信頼を得ています。



合璧流

不断地思考与行动
诚信规范创新卓越
创造价值共生共榮
感谢报恩回馈社会

出版社：合璧文化基金会
总 编：王迎春、林生富

发 行人：詹其力 编辑指导：陈庆煜、詹杰文
编辑委员：李高燕 印刷：上海综禾印刷有限公司

2012/07
第15期 07月10日发行

微かな夢

暗く元気のない母の目を見る。
おぼろげな、微かな夢が彼の痛みの中から生まれてくる。
暗く元気のない母の目は彼の辛さを物語り、
厳しさの中に深く落ちこんだ暗闇を映し出す。
もうすぐ終わりを告げる短い命。永遠の安息を望ぶしかない。
助けのない世界から病のない安寧の地に向かって旅立つ。夢。このとき彼の心に微かな夢が生まれた。



若かりし頃の母・重盛さん

母が李一族に嫁いだのはまだ李一族が栄えているときでした。しかしその後、家計は悪化していきました。「富は三代続かない」。その言葉通り、裕福だった家は360度の大転換で貧困へと変わっていったのです。子供は全部で14人。食べていけただけでも苦しい生活はその後も続きました。母が病に倒れたのです。風湿性関節炎（リウマチの一種）で2年もの間、苦しみながら病の床に臥せていました。少しでも体を動かすと、全身痛くてたまりません。そうして母は身体的にも精神的にも弱っていきました。そんな母の姿を、彼はただ見守るだけでした。彼には何もできませんでした。このとき、もし5万円のお金があれば、母はもっとよい医療処置を受けられたはずでした。少なくとも痛みは和らげることができたでしょう。そして、もっと長生きして、子孫に開かれた晩年を過ごすことができたでしょう。



老後病魔で憔悴した様子

母には3人の兄弟、4人の姉妹がいましたが、みんな長生きでした。ほとんどが90歳以上、104歳まで生きた人もいます。遺伝子からすれば、母も少なくとも90歳までは生きられたと思います。しかし、母は55歳で病気のためこの世を去りました。息子の彼は耐えられなかったと思います。それは一生忘れることのできない痛みにちがひありません。このとき彼の心の中に人を助けるという愛の炎が燃え出したのです。決して消えることのない炎が。「自分の家の老人を大切にするように他所の老人も大切に。わが子を可愛がるのと同じように他所の子も可愛がる」。こういう言葉がありますが、彼はその後おばさんたちを養い、見ず知らずの他人を助けます。これも彼の母への愛からはじまったことなのです。

彼は何十年にもわたって台東に住む2番目のおばさんに毎月5千円を送っていました。このことは近所の人たちにも有名な話で、みんな彼のことを「5千円の人」と呼んで尊敬していました（彼のことは一度も見たことがありませんでしたが）。ある日、彼がおばさんを訪ねて台東にきたときのことです。みんなは口を揃えて「5千円が来た！」と叫んだそうです。そして、おばさんが94歳で亡くなったあと「5千円」の話は伝えられたということです。

5番目のおばさんの話もしまよう。おばさんが生活に困っていたとき、婿嫁との関係はあまりよくありませんでした。しかし、彼が毎月5千円を送るようになってからというもの、ふたりの関係はよくなり幸せに暮らしたということです。5番目のおばさんは彼に会うときはいつも彼の手を硬く握りました。そこには言葉では表せない感動がありました。今、おばさんの娘は56歳になりますが、当時このははっきり覚えているそうです。

このふたりのおばさんのほかに、彼は何人のおばさんに毎月5千円を送っています。

彼がおばさんたちにお金を送るのは母に対する思いのほかに、彼自身の強い慈悲の気持ちもあります。そうでなければ、どうして見ず知らずの人を何人も経済的に助けたりするのでしょうか（援助の例はあまりに多いので、ここには挙げません）。

あの日の微かな夢は後になって助けを必要としている人や病気で生死の関を彷徨っている人や苦しい生活に喘いでいる人を救いました。

かつて見た微かな夢を、彼は実現させました。彼の会社の経営理念「感謝と報恩の念を以て、社会に寄与する」がまさにそれだからです。暗く元気のない母にとっても、これは大きな意義のあることだと思います。きっと天国からそれを見て、微笑みを浮かべていることでしょう。

おぼろげに生まれた微かな夢は
やがてははっきりと叶いました。 微かな夢。

(注：文中の彼は上海合璧電子の詹其力董事長です) 上海合璧總務 李高燕特助

利益の創造は企業の經營過程、「價值創造、共生共榮、感謝と恩返し、社會への還元」、これこそわたしたちの最終目標。